

令和 7 年度の発掘調査状況について

1 主な目的

天守台及び小天守台基礎部の状況を把握するとともに、本丸上段・下段堆積層に関する所見を得る。

2 調査箇所

5 か所（T 1：天守台北西部、T 2：天守台北東部、T 3：東小天守台南東隅、T 4 - 1・2：東小天守台北東隅、T 5：天守台南東隅）

調査箇所の選定に当たっては、

- (1) 本丸上段と下段の堆積状況の比較
- (2) 天守台と小天守台の石垣構築手法等の比較
- (3) 戦後火災整理層（1 b 層）についての史跡内における堆積状況の把握
- (4) 戦後火災整理層（1 b 層）と内堀石垣との関係性の把握
等を検討するための基礎情報を得ることを選定基準とした。

3 主な成果（資料 3 - 2）

- (1) 今年度の調査箇所のいずれにおいても、石垣基礎の設置面は人為的に構築・盛土された堆積層（4 層）上であることが確認された。下段の調査箇所では、4 層の下位に自然堆積層である 5 層が確認されているが、上段の調査箇所では確認できていない。
 - (2) 石垣基礎設置面等の標高について
下段の調査箇所では、天守台で TP（東京湾平均海面を基準にした高さ）2.6m 前後、小天守台で TP2.2m 前後を測る。設置後は TP3.1m 前後まで人為的に埋め戻されており、この標高が広島城築城時における本丸下段の初期地表面であったと考えられる。
上段の調査箇所では、天守台・小天守台ともに TP6.1m 前後と想定していたが、天守台石垣基礎についてはさらに下部へ続くことが判明したため未確認である。石垣設置後は、天守台南東隅部で TP7.2m 前後まで、小天守台南東隅部で TP6.8m まで人為的に埋め戻されており、広島城築城時の本丸上段の初期地表面は、天守台から小天守台に向かって約 0.4m の下り傾斜として計画されていた可能性が考えられる。
 - (3) 昨年度の調査と同様に、天守台・小天守台石垣の築石には、埋め戻されていた部分に石材の「化粧」が施されていないという特徴が共通して認められる。
 - (4) 戦後の火災整理層である 1 b 層は、すべての調査箇所を確認されたが、その層厚や遺物の含有量には場所によって偏りが認められる。
 - (5) T 1 北側拡張部において内堀裏石垣を確認し、それを埋めるように存在する 1 b 層の広がりを確認した。また、T 2 北側拡張部では昭和 40 年代の内堀石垣整備によって削平された 1 b 層北端部を確認している。
- ※ これらの調査成果を広く周知し、史跡整備への理解を深めるため、市民向けの発掘調査現地説明会を令和 7 年 12 月に開催し、434 人の参加があった。